

中部の

エネルギーを 築いた

人々

四日市製紙、静岡電力、静岡電気鉄道の経営に活躍し、
伊勢電気鉄道の拡大路線で闘った **熊沢一衛**

熊沢一衛は、四日市製紙を振り出しに、電力業、電気鉄道、銀行など幅広い分野の事業に携わり「東海の飛将軍」と呼ばれたが、昭和恐慌の中で拡大路線に蹉跌をきたし、鉄道疑獄にも連座するなど波乱の生涯を送った経営者である。熊沢は明治10年11月、三重県三重郡河原田村(現四日市市)の素封家、熊沢市兵衛の長子として生まれた。津中学に進んだが病気で中退、回復後軍務につき、日露戦争時は予備役の招集を受け、任務終了後の同39年9月、四日市製紙に入社した。



熊沢一衛

四日市製紙芝川工場の改革

四日市製紙は、本社は四日市に置かれたが、工場は水力が豊富で原料パルプの入手しやすい静岡県富士郡芝川町に置いていた。同社は、明治41年電気事業部を設置し、水力発電で工場の動力を賄うとともに、地域への電力供給を計画した。熊沢は水利権の確保、静岡市との電力契約を実現し、経営者大川平三郎の認めるところとなり、同45年には取締役役に抜擢された。熊沢が活躍できた要因の一つに、宮内大臣伯爵田中光顕の知遇を得たことがあげられる。当時田中は庵原郡岩淵に別邸「古谿荘」(現野間別荘)を建

設中で、電気の供給を望んでいたが、熊沢は一般供給に先立ち、工場の自家用水力で電気を引き期待に応えた。田中光顕揮毫の扁額「無



大川平三郎



伯爵田中光顕



古谿荘(現野間別荘)



大久保発電所貯水槽の扁額「無尽蔵」(田中光顕揮毫)

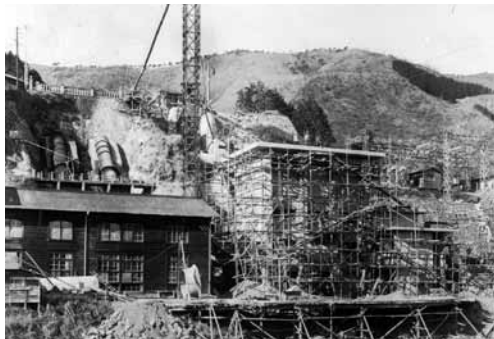
尽蔵」が、四日市製紙の建設した大久保発電所（現在西山、明治44年8月、1792kW）の取水槽に掲げられているのは、両者の親密な

関係を示している。（熊沢は『青山余影 田中光顕小伝』（大正13年2月）の編纂も行っている。）

静岡電力の設立

四日市製紙は、大正9年3月、同じ富士郡に製紙工場を持つ富士製紙と合併し、同年10月、電気事業部門を分離して静岡電力（社長：大川平三郎）を設立した。熊沢は専務取締役として経営を取り仕切った。四日市製紙時代に芝川筋に大久保発電所、川合発電所（現長貴、大正9年2月、3080kW）を建設していたが、静岡電力はさらに鳥並発電所

（大正11年2月、1060kW）、佃島発電所（現芝富、大正15年2月、632kW）、補給用火力として静岡市内に相生町火力（大正13年1月、2000kW）を建設して、静岡市電気部への電力供給のほか、同市周辺の安倍郡、志太郡、富士郡、庵原郡など7郡に電灯電力を供給し、駿河地域の中核的な電気事業となった。（同15年10月、東京電力に合併）。



建設中の大久保発電所（現西山発電所）



川合発電所（現長貴発電所）外観（当時）

静岡電気鉄道の積極経営

大正12年3月、大川平三郎は請われて駿遠電気（就任後静岡電気鉄道に改称）の社長に就任し、熊沢は専務取締役として実質的に経営を担った。駿遠電気は、静岡と清水港を結

ぶ電気鉄道で、大正8年5月、軽便鉄道王、雨宮敬次郎が運営した大日本軌道静岡支社の路線を譲り受けて、地元資本により設立した会社である。同社は、安倍川支流の藁科川に



駿遠電気の建設した大川発電所現況



静岡電鉄の建設した清沢発電所現況

大川発電所（250kW）を建設し、鉄道の電化を進め、地元の安倍郡大川村・清沢村などに電気を供給していた。大川平三郎の社長就任後は、静岡清水線の複線化、市内線の敷設、沿線に草薙球場や狐ヶ崎遊園地の建設、昭和3年には清沢発電所（500kW）を新設するなど、積極経営に転じた。

以上見たように、熊沢は、電力業と関わりの深い四日市製紙、静岡電力、静岡電気鉄道などの事業（3社の有した6つの水力発電所は現在も中部電力の発電所として運転中）のほか、大井川鉄道、四日市鉄道、四日市倉庫、大台林業、日本鋼管など各種事業の経営に携わった。

躓きの石となった伊勢電気鉄道・四日市銀行経営

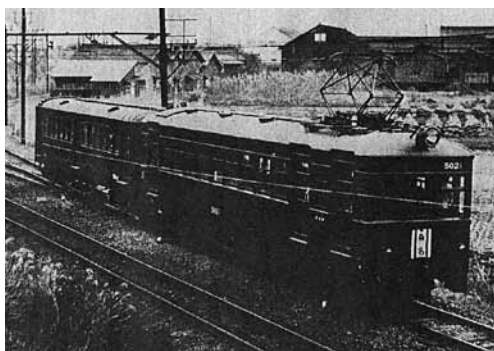
大正14年12月、熊沢は四日市銀行頭取であった義兄高田隆平から銀行経営を託され、同行の頭取に迎えられた（木本正次『東への鉄路』参照）。さらに同15年9月には、業績不振で苦しんでいた伊勢電気鉄道（伊勢鉄道を改称）の社長に就任し、郷里での事業に情熱を燃やしたが、2つの事業経営は、熊沢の運命を暗転させる躓きの石となった。

伊勢電気鉄道は津・四日市間で電車を運転していたが、熊沢は宇治山田への延伸と名古屋への延伸という2つの野心的な計画を進めた。昭和4年1月、まず四日市・桑名間が開通し、同5年4月には津・松阪間への延伸（同6年12月宇治山田まで開通）を行った。一方、名古屋への延伸は、熊沢の辣腕により同3年11月に免許を得、さらに同4年3月、鉄道省と交渉し、付け替え工事で不要となった関西線の本曾川橋梁の払い下げ、揖斐・長良川橋梁の貸与を受けた。この免許取得の過程で私鉄

疑獄事件に巻き込まれ、同4年9月には贈賄容疑で逮捕された。

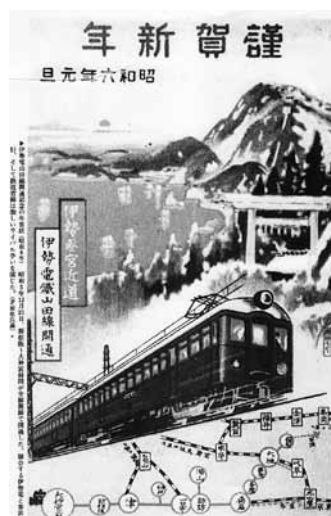
頭取の逮捕で四日市銀行に影響が及び、さらに宇治山田への延伸と参宮急行電鉄との競争で業績が低落した伊勢電気鉄道への巨額資金の貸付けに対し銀行経営への不安が生じ、同7年3月取り付け騒ぎが起き、遂に払い戻し停止に追い込まれた。熊沢は失脚し（同5年1月四日市銀行頭取辞任）、伊勢電鉄は参宮急行電鉄に合併され、名古屋への延長線敷設は新たに設立された関西急行電鉄の手で推進されることとなった。三重県資本による電鉄運営を目指した熊沢は、不遇のまま、昭和15年2月、63歳の生涯を終えている。

（浅野 伸一）



伊勢電気鉄道の電車

出典：「伊勢電・近鉄の80年」 郷土出版社 1976年



伊勢電気鉄道山田線開通

出典：「伊勢電・近鉄の80年」 郷土出版社 1976年